

青年期の孤独感とインターネットコミュニケーションに関する研究

(愛媛大学教育学部研究科学校臨床心理専攻) 篠田 知美
(愛媛大学教育学部教育心理学教室) 相模 健人

Study for adolescence's loneliness and internet communication Tomomi SHINODA and Takehito SAGAMI

(平成24年6月5日受理)

I. 問題と目的

近年は情報化社会と呼ばれるほどインターネット利用者が増加している。その一方で青年期は、孤独感を頻繁にまた強く感じる時期である(原田, 1999)。このことは青年期の発達課題が心理的に独りになって取り組む過程を経て達成されるものであることと関わりが深いと考える。また、対人的な孤独感と自分自身が究極的に他者と分離していることに気付き自分自身の人生における決定については完全に自分が責任を負うことに気付くことによって生じる。実存的(対自的)な孤独感は、対人的な孤独感に比べて肯定的な意味あいを持つものであり、しばしば、対人的な孤独感が変化してゆくべき目標として述べられる。花井・小口(2006)は、孤独感研究は、対人関係や人格形成に否定的効果あるいは肯定的効果を及ぼすことを示す2種類に大別することができる。この2種類の研究は理論的背景が異なり孤独感をとらえる際に否定的効果では孤独感を個人の特性とするのに対し肯定的効果は主に誰もが経験する事象としていると考えられる。肯定的効果の立場での孤独感を経験するととらえると孤独感に対してどのように対処したかも孤独感に含まれる。

対人関係についてであるが、情報化された現代では、日常においての対人関係の他にインターネットコミュニケーションツールを利用してコミュニケーションを取る者が非常に増えている。インターネットと孤独感の関連については先行研究でも多く取りあげられているが、多くはインターネットを利用すると孤独感が増幅されるといった内容である。中山(2006)はインターネット利用行動が影響を及ぼすと考えられる心理要因である孤独感と対人不安を取り上げており孤独感と対人不安および

関連する心理要因とインターネット利用行動との関連についての先行研究をレビューしている。この中で社交性の低い人にとって携帯メールで形成されるネットワークが孤独感低減の効果を持つが社交性の高い人の場合には携帯ネットワークは効果を持たないことが示されている。また対人不安とインターネット利用の関係としては不安傾向の強い人は状況やメディアに関わらずコミュニケーション時の状態不安が高いことが示された。

現代においては、情報化社会と呼ばれるほどインターネットが普及している。株式会社D2C(2012)が実施した「モバイル利用動向調査」によれば、15歳から69歳の男女3095名に対して2012年2月PCインターネットによるアンケート調査を行いフィーチャーフォン(従来型のi-modeやezwebを使用することができる携帯電話)およびスマートフォン(iphoneを代表とするPCサイトを閲覧することができる携帯電話)の利用動向についてまとめている。調査の結果によればフィーチャーフォンのみのユーザが74.5%スマートフォンのみのユーザが19.0%両方の端末を併用しているユーザが6.5%だった。スマートフォンのみのユーザと併用しているユーザを合計すると25.5%となり10月調査(20.6%)と比較すると4.9ポイント増加している。フィーチャーフォンのみユーザの各メディアとの1日あたりの接触時間の平均値は、パソコンでのインターネット利用(172.8分)、テレビ(170.8分)、フィーチャーフォンでのインターネット利用(24.0分)の順に接触時間が長いという結果となった。一方で、スマートフォンのみユーザは、スマートフォンでのインターネット利用(141.2分)、テレビ(141.0分)、スマートフォンでのアプリ利用(51.3分)の順に接触時間が長いという結果となった。これらの事からス

スマートフォンの普及率が非常に高くなっていることが分かると同時にスマートフォンを所有している者はスマートフォンでインターネットにアクセスしている時間が長いことと言える。インターネットコミュニケーションツールでSNSがあるが、ニールセン (2012) がミクシィ、Twitter, Facebookにパソコンから上記4つのサイトへのアクセス数を調査した。その結果、Facebookが1350万人、Twitterが1341万人、ミクシィ 683万人がこれらのSNSにアクセスしている。以上のことからインターネットコミュニケーションツールは現代青年にとって身近なものであり、身近であることにより、インターネット上でのコミュニケーションにおいて、そこで何らかのトラブルを巻き込まれた人もいと考えられる。そして、そこから自分は1人であると感じ、孤独感を感じる事が考えられる。そこで本研究では、孤独感とインターネットの現状について現代青年がどのように理解しているかについてインタビューを通して明らかにすることを目的とする。

II. 方法

1. 調査対象者

A県内に住む20代の青年男女4名に半構造化面接を実施した。

2. 調査時期

2011年10月～12月。

3. 調査内容

調査内容は、研究目的を基に調査者が独自に項目を作成したインタビューシートを用いたものである。インタビューシートは「日常生活の対人関係」では、「あなたには日常生活において友人はどのくらいいますか」、「日常生活においてあなたの考え方や感じ方に心から共感してくれる人はいますか」という質問で構成されている。「インターネットの関わり」というテーマでは「どのような時にインターネットを利用しますか」、「1週間にどのくらいインターネットを利用しますか」という質問で構成されている。「利用するインターネットツール」というテーマでは「インターネットにアクセスする際にさまざまなツールがありますがその中でどのような物を利用していますか」、「1日にどのくらい携帯メールを利用しますか」という質問で構成がされている。「孤独感」

というテーマでは、「孤独感を感じることは成長する上でどのような糧になると思いますか。」、「あなたにとって孤独感を感じることはとても辛いことですか」という質問で構成されている。

4. 調査手続き

教育学部内の相談室にて1回につき40～50分程度の時間で半構造化面接を実施。面接内容は調査対象者に同意を得られた後にICレコーダーにて録音をした。

III. 結果

KJ法の結果をFig.1で示す。

IV. 考察

KJ法の文章化を考察とする。

本調査の結果 (Fig.1) から、島は「1週間にどれくらいインターネットを利用する」「SNSを利用する」「SNSを通して安らぎや安心感を得ることができる」「日常生活の友人はどれくらいいる」「どういったときにインターネットを利用する」「インターネットを利用していないときの過ごし方」「インターネットを利用することでの気持ちの変化」「インターネットを通して知り合った友人に会ったことがある」「孤独感を感じること」「インターネットを利用する時はどんな時」「動画サイトにアクセスする」というように大きく11の島に分かれた。図解化としてまとめた後にまず、他者とのつながりという大きな島の中の1つに日常生活において友人はどれくらいいるかという島の中で調査対象者のうち2人は「たくさんいる」または「50人くらい」と答え、あとの調査対象者2人は「2人、4人」と答えた。このことから、多くの友人がいると少数の友人がいるという結果となった。岡田 (2007) は、現代の青年は、見かけ上、楽しくはしゃいでいる反面、その実際は他者との関わりが薄くなり、形ばかりのかかわりにしがみついているということを指摘している。また、大谷 (2005) は、「現在の大学生の傾向はおおまかにいって「極端なひきこもり傾向をもつ若者グループとかたや極端なまでに社交的な若者グループ」という二極化」という図式で考えると理解しやすい」というように、現代の大学生の友人関係は二極化されていることを論じており、本研究でもその傾向が見られる。

対人関係

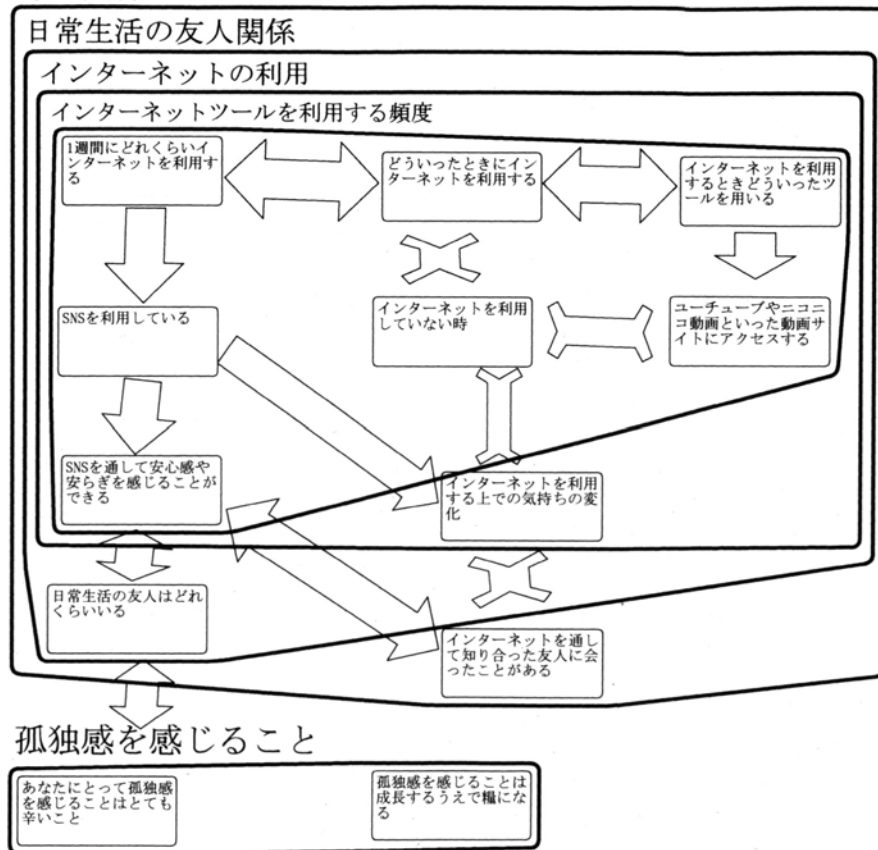


Fig.1 青年期の孤独感とインターネット利用

次に、友人に関連する島でインターネットに関連して、日常生活の友人とインターネットを通してやりとりしているかという島には、1名は「無料の通話アプリに誘われたが、そんなにパソコンに縛られたくない」という理由で断った調査対象者が1名。そんなにパソコンには縛られたくないと語った対象者、「メールはめんどくさい、それなら電話したい。連絡する時はほとんど電話」と語られたことから、電話はしたいからと言って長い時間そういったことに縛られるのは好まないようである。それ以外の人のうち1名の調査対象者は、「日記にコメントをする」と語っている。また、「相手がつぶやいたのを見たりとか日記の更新を見たりするくらい、小学校から一緒だけど大学は違う友達の日記やつぶやきを見る」と語っている。これらのことから、日記へのコメント、Twitterへの投稿をするということが分かっており、二極化されていることが分かる。

また、インターネットツールを通して知り合った友人

がいるかどうかという島では、ミクシィでの友人、いわゆるマイミクシィについて、「ミクシィでの友人は150人くらい」、「アカウントだけ置いてる友人ならば50人くらいいるが、まったくやってない。オンラインゲームもやっていたがそこで知り合った人は2人」と語られている。また、「3、4人くらい」と語られた調査対象者が1名と、ミクシィやオンラインゲームなど、ソーシャルネットワークワーキングサービスを利用した中で友人が多くできたが、この島でも日常生活の友人の島と同様に人数が多めの人と少なめの調査対象者の2つに分かれる結果となった。これらのことから、SNSの普及により、外向的な人は幅広い人とSNS上のコミュニケーションを取ろうとする反面、内向的な人は近い友人のみとコミュニケーションを取ろうとして、SNS上であまりコミュニケーションを取ろうとしないことが示唆される。次に、個人の対人関係に関する内容で、日常生活の友人とインターネットを介しての友人はどちらが多いかという島で

は、「日常生活の友人の方が多い」と2名の調査対象者が答え、そのうちの1名は「高校の友だちが大学に多い」という事も含め4名が日常生活での友人の方が多いと言えることがわかる。このことから、日常生活の友人も大事にしていることが分かった。

次に、日常生活の友人とインターネットを介しての友人と接するのとはどちらの方が気が楽かという島では、日常の方が楽と答えた人が多く、日常において人と関わる方が気持ちとしても緊張したりすることは少ないという結果だった。

これらのインターネットツールを利用して全員、友人ができていたことであったが、大きな島の中の2つめ“インターネットを利用する頻度”という島があり、その中の島で、それらのツールを用いた上で、1週間にどれくらいインターネットを利用するかという質問に対しては週に3回くらいと答えた人が1名いたのに対し、使わない時は月に1回くらいと答えた人がいた。また、週に2、3回と答え、「iPhoneを所持していてそこからインターネットを利用する」と語った対象者もいた。また、部屋にテレビを置いてないため情報媒体がインターネットしかないためにインターネットを頻繁に利用する、インターネットのニューズピックで気になった内容があればチェックしているくらいかなと語っており、利用の頻度としては1日の平均で3時間くらいだから1週間にすると21時間という者もいた。このように、インターネットをテレビの代わりとして主要な情報媒体として捉えている人にとってはインターネットは非常に重要であり、接続している時間も長くなることが考えられる。先行研究においても、従来型のi-modeやezwebを利用することができるフィーチャーフォンとスマートフォンを利用する人のインターネットの利用時間を見てみると、フィーチャーフォンを利用している人のパソコンでのインターネット利用時間は172分、フィーチャーフォンでのインターネット利用時間は24分であるのに対し、テレビの視聴時間は170分。次にパソコンサイトにアクセスすることができるスマートフォンを利用している人のインターネット利用時間141分、スマートフォンでのインターネット利用は65分であるのに対しテレビの視聴時間は171分(D2c, 2012)であった。このことから、テレビを視聴よりもパソコンや携帯電話を使ってイ

ンターネットを利用している人が多く、インターネットを主要な情報媒体として活用している人が多いことが示唆される。

インターネットを利用する時間は人によって様々であるが、どういったときにインターネットを利用するかという島では、「家で暇な時に、インターネットのニューズピックで気になるのがあったら」、「調べ物をする時に」と回答した調査対象者が1名、「インターネットで調べ物をする」時に利用すると答えた調査対象者が1名。他には「動画を見たりする時」「課題が出た時に」が1名、「インターネットで買い物をするとき」「暇な時とかちょっと調べ物をするときなどに使います」と答えた人がそれぞれ1名であった。このように、課題が出た場合の図書館に行くことや、買い物をしに行くという事をインターネットを用いて、その場に行かずに代用している。動画サイトやニューズピックなどインターネット以外で代用できないものを閲覧するなどインターネットの利用方法は様々であるが、代用できないものの1つである動画サイトについて、ユーチューブやニコニコ動画といった動画サイトにアクセスするかどうかの島では「友人に勧められたアーティストの曲が良いと教えてもらった時に」、「自分の好きなアーティストを見たりする」と語った調査対象者が3名いた。これらのことから、テレビを視聴するよりも暇つぶしとして動画サイトが使われていることが分かる。これは、インターネットが普及した中で動画サイトが誕生し、テレビ以外に選択肢の幅が広がったためである。何もすることが無い時にこういった動画サイトにアクセスしており、自分の好きなミュージシャンを見ることが分かる。また、インターネット上の対人関係に大きく関わる項目で、ミクシィやグリーなどのソーシャルネットワーキングサービス(SNS)を利用しているかという質問に対しては、4名の対象者ともミクシィをしているという回答であったが、そのうちの1名はここ2年ほどはアクセスしていないという対象者であった。また、ミクシィをしている人の中の1人にモバゲーをしている調査対象者がいた。

その他の調査対象者のうち1名は「ミクシィにアクセスはしていない、いつ入ったかも覚えてないくらい、その頃にいろいろゴタゴタがあってから触らなくなった。アカウントは残している。強迫観念っていかこうして

あげないかんみたいなのというのが煩わしい。自分からそういう外部のサイトの日記を書いたのは2年くらいは前かな」と答えた対象者、「ミクシィは携帯でやりますゲームとアプリはパソコンでしている」という対象者が1名いることから、4名ともに参加している媒体は様々ではあるが、SNSを利用しているという結果を得ることができた。これらのことから、SNSが現代青年にとって重要な役割を果たしていることが分かる。しかし、インターネットコミュニケーションが普及した事でトラブルを経験した調査対象者がいることも分かった。SNSを利用しているかどうかの質問に関連して、SNSを通して安心感や安らぎを感じることができるかという島では、「久しぶりにミクシィにログインしている人がいたら生きてるんだと思う」と回答した対象者が、「安心感を感じることもある」と答えた人もいるように、普段、頻繁に会うことができない人の近況を知ることによって安心や安らぎを感じることが分かる。また、それとは反対に、「安心感を感じたことは無い」と答えた人もいた。安心感とは別に、「自分の知らない世界というかこういうことに興味があるんだとかこういう活動をしているんだという、その人の知らない新たな一面を知ることができた」というと答えた対象者も1名いた。またある1名は「焦燥感がある」と回答した者がいることから、SNSでのコミュニケーションに問題を抱えている者がいることが示唆される。

また孤独感に関連して、孤独感を感じることは成長する上でどのような糧になるかという島では、「1人でできないことも友達がいたら心強いかどうか分かる」と答えた調査対象者が1名、「自分が1回孤独になったら他の人に優しくしてあげられるんじゃないか」と1名の対象者が答え、「絶対悪いものではないと言えるよね。あまり聞いた感じでは良くない感じに聞こえるよね孤独ってどう？って」と語った対象者が1名「自分と同じ考え方の人もいないし他人の考え方を取り入れるのも悪くないし自分と同じ考え方の人もいないし他人の考え方を取り入れるのも自分にとってプラスになると思うのでそうやって人の良いところを取り入れることで成長の糧になるんじゃないかと思います」と語られ、4名が一度は孤独感を感じることに辛いこと、怖いことであると語ってはいるが、その孤独感を感じた事を糧に、自分がどう

人に接していくことができるか、また、自分の考え方が変わる気がするプラスに捉える対象者が多いことが分かった。

孤独感をプラスに捉える人が多かったことが先ほどの島で分かったが、インターネットツールを通して誰かと常につながりたいと感じることはありますかという質問に対しては、4名ともつながりたいと感じることはないと語られた。中でも、1名は「それなら直接会いに行く」と語った対象者がいた。インターネット上でのつながりよりも、人との直接的なつながりを大事にしていることが分かる。

V. まとめ

青年期において、インターネットは身近なものとして捉えていることが分かる。また、SNSをはじめとしてオンラインゲームや携帯メールなどで人とつながろうとする傾向もある。しかし、インターネットを通して誰かとつながりたいからと考える調査対象者がほとんどである一方、また、孤独感を感じることは重要であると考えていることが分かった。

VI. 今後の課題

今回のインタビューで、インターネットコミュニケーション上でトラブルに巻き込まれた調査対象者がいたが、トラブルに巻き込まれた経緯について詳しく聴くことができなかった。このことからインターネットコミュニケーションでのトラブルと孤独感の関連について検討していくことが重要であると考えられる。

引用・参考文献

- ・安藤玲子・高比良美詠子・坂本章 (2004) 「中学生のネット使用が孤独感・ソーシャルサポートに与える影響(2) 一目的別ネット使用のポジティブ効果 教育心理学研究 p86-87
- ・安藤玲子・高比良美詠子・坂本章 (2005) 「インターネット使用が中学生の孤独感・ソーシャルサポートに与える影響」 パーソナリティ研究 第14巻 第14巻 第1号 p69-79
- ・「デジタルネイティブ」 2012年
<http://iryoutohoken.com/dejitaru/index.html>

- 原田華 1999年 「青年期の孤独感」－質問紙とTAT物語から見た内的世界の様相 京都大学大学院教育学研究科紀要 第45巻 p393-405
- 花井友美・小口孝司 2005年 「過去の孤独感が現在の親和動機・社会的スキルに及ぼす影響」実験社会心理学研究 第44巻 p62-70
- 五十嵐祐 (2003) 「メディアコミュニケーションが心理的健康に与える影響」名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要. 心理発達科学 50, 323-325,
- ネットエイジアリサーチ 2012 SNSサイトの利用実態調査 ～40代のSNS登録者の6割強が「GREE」に登録～
[Http://www.mobileresearch.jp/investigation/research_date_100524.html](http://www.mobileresearch.jp/investigation/research_date_100524.html)
- 「総務省平成22年通信利用動向調査」
<http://webtan.forum.impressrd.jp/n/2010/04/29/7924>
- 内海しよか 2010年 「中学生のネットいじめ, いじめられ体験－親の統制に対する子どもの認知, および関係性攻撃との関連－ 教育心理学研究 第58巻 p12-22